杜甫の自称表現と「北征」詩

――「杜子」と「臣甫」を中心に――

谷口真由実

一　はじめに

杜甫の詩にはさまざまな自称表現がみえる。[1] その中でも注目されるのは、詩中に自己の姓名を自称表現として直接用いている例である。そのような例は漢魏六朝詩にはあまり見られない。もちろん、散文や賦の中では、自己の姓や名を用いる自称表現をみることはできる。たとえば、魏の曹植「髑髏説」、宋の謝霊運「山居賦」などに例がある。[2]

これに対して杜甫は、散文や賦ではなく、詩の中で、自己の姓や名を自称表現にたびたび用いているのである。その中で、とりわけ印象的な例は「北征」詩（『杜詩詳註』巻之五以下『杜詩詳註』を『詳註』と略す）の冒頭で用いられている「杜子」という例ではないだろうか。

皇帝二載秋　　皇帝　二載の秋
閏八月初吉　　閏　八月初吉
杜子将北征　　杜子　将に北征して

蒼茫問家室　蒼茫　家室を問はんとす

肅宗皇帝の至徳二載（七五七年）、閏八月の一日、私「杜子」は、北に旅立ち、あわただしく家族を見舞おうとしている。

この詩について、吉川幸次郎氏『杜甫詩注』（第四冊、筑摩書房、一九八〇年七月）「北征」にはつぎのように指摘している。

従前の文学の意識では、この詩のような議論と叙述、したがって長篇の言語であることは、そもそも詩の任務でなかった。その任務を担当するジャンルは、別にあった。長篇の韻文、「賦」である。（中略）またそのことは、杜の自覚にもあった。「北征」という題が、それを示す。この題は、漢の班彪の「北征の賦」にならうからである。班氏のその賦は、「文選」の賦の部分のうち、九、紀行の類に収め、前後漢交替の紛乱期、長安から甘粛の涼州への旅の、感慨を伴なっての叙述である。（中略）次の十に収める「西征の賦」は、晋の潘岳が、洛陽から長安への旅を叙述する。それらが「征」を賦の名とするのにならって、この詩も「北征」なのである。名をおそうばかりではない、賦の内容であり任務であったものをも、奪ってここに移す。（中略）「賦」も脚韻をふんだ言語である点では、韻文である。しかし「物を体す」のを任務とする点では、散文の要素をもつ。杜が「賦」の任務を奪って詩に移したということは、散文の要素を詩に導入して、詩を新しくしたことである。

「賦」の要素を詩に持ち込み、散文のように議論を述べる部分のあることは、[3]吉川氏の指摘するとおりであろう。この詩の冒頭は「皇帝二載秋」と年紀に「皇帝」という語を冠して、旅立ちの年月日を非常に謹厳・荘重な言葉で歌い始めている。それはまるで散文の上奏文であるかのような書き出しである。その中で、自身を「杜子」

と表現しているのである。そして、この「杜子」という表現は、先に述べたようにあまり従来の詩には見られない姓＋「子」からなる自称である。[4] この点について前掲の『杜甫詩注』には次のように指摘している。

〔杜子将北征〕やはり荘重の語気。〔杜子〕の〔子〕は孔子、孟子、老子とともに、男子の重々しい美称。それを自称とするのは、知識人としての自負。杜詩ではここのみに見えるが、かつての散文では、長安の書生であったころの「雑述」「秋述」に、「杜子曰わく」、「杜子、病に長安の旅次に臥す」など。自称をも、議論の散文におけるごとく、重々しくした。前引の潘岳「西征の賦」歌い出しの自称も、「潘子」。（以下略）

杜甫が、ここで「杜子」という、自己の姓を冠した自称表現を用いた意識はどのようなものであったのだろうか。「知識人としての自負」や「議論の散文におけるごとく重々しくした」とすでに吉川氏によって指摘されているが、それだけなのであろうか。

この論文では、右の表現を始めとする杜甫における自称表現、特に名前などを付した自称表現について考えてみたい。

二　姓や名などによる自称

杜甫の詩中では、名前などを付した自称表現には次のようなものが見られる。

（1）杜子（1例）

（2）甫（6例）〔＊うち甫也（3例）、臣甫（1例）〕

（3）子美（1例）

（1）は、先ほど挙げた姓＋「子」からなる自称である。（2）は、名前による自称であり、その中には、下に

「也」を付した例と、名前にさらに「臣下」であることを明示する「臣」を冠した自称の例がある。最後の（3）は、自身の字を自称としたものである。

これらの用例について、制作時や作品名などを一覧にすると次のようになる（なお、制作年次については清、仇兆鰲注『詳註』によった。）。

番号	制作年	名前を伴う自称表現を含む句	作品名
①	天宝五載（七四六）	道甫問信今如何	送孔巣父謝病帰遊江東兼呈李白
②	天宝七載（七四八）	甫昔少年日	奉贈韋左丞丈二十二韻
③	天宝十三載（七五四）	在於甫也何由羨	病後過王倚飲贈歌
④	至徳二載（七五七）	杜子将北征	北征
⑤	至徳二載（七五七）	臣甫憤所切	北征
⑥	乾元二年（七五九）	有客有客字子美	乾元中寓居同谷県作歌七首
⑦	宝応元年（七六二）	甫也南北人	謁文公上方
⑧	大暦元年（七六六）？	甫也諸侯老賓客	酔為馬所墜諸公携酒相看

自身の姓を名のる場合や、自身の名のみで称する場合、あるいは字で名のる場合では、作者の自己認識や表出の仕方などに懸隔があるように思われる。

以下、一つ一つの場合についての検討を重ねて、その差異を明確にしてゆきたい。

三、姓に「子」を付した自称

姓に「子」を付した自称、つまり「杜子」という自称は、先述のように「北征」詩の冒頭に一例がある。

「北征」は、杜甫が左拾遺の任にあったとき、房琯を弁護して皇帝の逆鱗に触れ、三司の弾劾裁判を受け、辛くも罪を許された直後の作である。罪には問われなかったものの、いわば体よく暇を出され、家族を見舞うことをゆるされた。そこで、杜甫は後ろ髪を引かれながら、久しぶりに家族のもとを訪れたのであり、この詩はその時の作である。黒川洋一編『杜甫詩選』（岩波書店、一九九三年第四版）では、この詩について触れ、「帰至鳳翔墨制放往鄜州作」（帰りて鳳翔に至り、墨制もて放れて鄜州に往く作）という自注によって、杜甫が房琯事件が原因で停職、あるいは休職処分となった可能性を示唆している。

掲出した詩句に続く部分でも次のように詠じている。

維時遭艱虞　維れ時に　艱虞に遭ひ
朝野少暇日　朝野　暇日少なし
顧慚恩私被　顧みて慚ず　恩私を被むりて
詔許帰蓬蓽　詔もて蓬蓽に帰ることを許さるるを

安史の乱という未曾有の反乱が勃発し、まだ収束していない国家存亡の危機に際して、官民ともに暇などないはずなのに、皇帝のありがたい恩愛により詔勅で帰省を許された、と述べている。杜甫は確かに家族のもとを訪問することを望んではいたのであろうが、左拾遺として奉仕したいという使命感を抱きつつ、にもかかわらず、先の房琯事件の罪に関連して体よく暇を出された不満が言外にこめられているように思われる。

そして、先に述べたとおり、まるで皇帝への上奏文であるかのように、この詩は荘重な調子で書き始められているのである。「皇帝二載秋、閏八月初吉」は、日時の表記であり、「杜子将北征、蒼茫問家室」は、家族を見舞うという私的な旅行であることを示しているが、旅する主体が「杜子」であることによって、事件であるかのように浮かび上がってくる。自己の私的な旅が、歴史的事件と重なりあう時間を旅するものであり、私的な旅の中で体験したものがそのまま歴史的事件を語っているという公的な意味を持つことを、皇帝に対して言いたいのだとみなすことができる。そのように考えてくると、「杜子」は、杜甫が客観的に、自身の姿を公的な存在として、あるいは公的な存在であるかのように、詩中に描きこんだものだといえよう。杜甫は自身を「杜子」という自称表現で描きだしている。しかし「子」とはもともと敬称であるから、これは一種の他称でもある。詩の語り手は、家族のもとに帰るという私的な旅が、実は幾重にも公的・歴史的意味を持っていることを示すために、自己を「杜子」と呼んだのである。皇帝の命を受けて旅立つ一人の人物であるかのように描き出している。続く第五句・六句は、時代状況を客観的に捉えたものであり、「時」が「艱虞」に遭遇しているとか、「朝野」に閑暇が無いという言い方によって、「杜子」にぶつかり、見ているものが歴史的時間であり、広大な社会的現実であることが示される。第七句・八句は、「顧慚」や「恩私被」、「詔許」という表現から、今度は「杜子」の内側から自己の置かれた状況を捉えていると考えられる。しかも「恩私」「詔許」という表現は「杜子」の旅が天子（公的世界）との深い関わりを持つことを示している。

拝辞詣闕下　　拝辞して闕下に詣り
怵惕久未出　　怵惕して久しく未だ出でず
雖乏諫諍姿　　諫諍の姿に乏しと雖も

恐君有遺失　君に遺失有らんかと恐る
君誠中興主　君は誠に中興の主たり
経緯固密勿　経緯　固に密勿たり
東胡反未已　東胡　反して未だ已まず
臣甫憤所切　臣甫　憤りの切なる所なり
揮涕恋行在　涕を揮って行在を恋ふ
道途猶恍惚　道途　猶ほ恍惚たり
乾坤含瘡痍　乾坤　瘡痍を含む
憂虞何時畢　憂虞　何れの時にか畢らん

右の部分は、第八句に続く第九句から第二十句の部分であるが、この部分もやはり「杜子」なる人物の内側から捉えた表現である。「拝辞」「詣」「未出」「恐」「恋」などの動詞は、「杜子」の動作・行動として描かれている。そしてこの部分の中ほど、詩の第十五句に、「臣甫」という表現が現われる。「杜子」が他称の形をとった自称であるとするなら、「臣甫」は明瞭に自称の形をとった自称である。「杜子」という自称で始まった詩が、「臣甫」という自称に変化しているのはなぜだろうか。

ところで、まず「杜子」という表現に立ち返ってこの自称の意味を検討してみたい。この表現はすでに指摘されているように、晉の潘岳の「西征賦」（『文選』巻十）の表現を踏まえる。

歳次玄枵　歳は玄枵に次る
月旅蕤賓　月は蕤賓に旅す

丙丁統日　　丙丁　日を統べ
乙未御辰　　乙未　辰を御し
潘子憑軾西征、　　潘子　軾に憑りて西征し
自京徂秦　　京より秦に徂く

潘岳が「西征の賦」を作った背景について、題下の李善注によると、

臧栄緒晉書曰、岳為長安令、作西征賦、述行歴、論所経人物山水也。（臧栄緒の『晉書』に曰く、「岳　長安令と為りて、西征の賦を作る、行歴を述べ、経る所の人物・山水を論ずる也。」と）

潘岳が、長安令となり、都洛陽から長安に旅をした道途で遭遇した人物や自然、また旅の感慨を描いたという。「潘子」と自称表現を用いたことについて李善は次のように注している。

潘子、岳自謂也。馮衍「揚節賦」曰、馮子耕於酈山之阿。（潘子は、岳　自ら謂ふなり。馮衍の「揚節の賦」に曰く、「馮子酈山の阿に耕す」と。）

李善は、「潘子」とは、潘岳が自分について言ったものであり、潘岳よりも更に遡った後漢の馮衍[5]の「揚節の賦」に「馮子酈山の阿に耕す」の句があることを指摘している。馮衍は光武帝に罪を得たものの、詔勅によって実際の罪には問われず、故郷に帰った（『後漢書』巻二十八、馮衍伝）。杜甫は、肅宗を光武帝の中興になぞらえてしばしば表現している。そのことから推測するならば、ここで潘岳の「潘子」を踏まえていることはまちがいないが、それだけではなく、馮衍の「馮子」という表現を想起し、わが身と重ねて表現したのではないだろうか。

馮衍の「馮子」も潘岳の「潘子」も、いずれも自身を外から第三者的に捉えて表現したものであり、杜甫の「杜子」もその伝統を踏まえて表現されている。また、潘岳の長安令への任命は、前年の元康元年（二九一）に国政

を補佐していた太傅楊駿に連座して罪に問われ、死刑になるところを許されたのであった。この経緯は、杜甫が粛宗の逆鱗に触れて、弾劾を受けたが、罪を許された体験と重なる。杜甫は「秦州雑詩二十首」第一首においても、潘岳の「西征の賦」を踏まえて、旅立ちを描いている。おそらく、この「北征」においても、杜甫は潘岳の表現にわが身を重ね、「西征の賦」の題意を援用して「北征」と名づけたのであろう。また、その中で、馮衍・潘岳の「馮子」「潘子」と同様の「杜子」を用いたことには、杜甫がまさに歴史的な重大局面に立ち合っている、との認識を皇帝に向って語ろうとする意図があるだろう。現在は歴史的な時間であり、そこで起きている事実と向き合い発言しなければならないという公的な意味を杜甫は切実に自覚していた。だからこそ、「皇帝二載秋」に向き合う「杜子」という、自己を客体化した呼称を自称として用いたのである。

四　自身の名前による自称

ところで、詩の第十五句に現われてきた「臣甫」という自称はどのように捉えられるだろうか。それを考えるために、自身の名を用いた自称表現の例を見ておきたい。

自身を名前の「甫」で称する用例は、前掲の表でみるように全八例中、六例を占める。さらに詳しく分類するならば、（A）ただ「甫」と称する場合、（B）「甫也」と称する場合、（C）「臣甫」と称する場合に分かれる。第十五句は（C）にあたるのだが、まずそれぞれの場合について、以下考えてゆくこととしたい。

1　「甫」

まず（A）ただ「甫」と称する場合に該当する右の表の①②の例について検討する。

まず①は、「送孔巣父謝病帰遊江東兼呈李白」（孔巣父の病を謝して帰り江東に遊ぶを送り、兼ねて李白に呈す、『詳註』巻之一。）詩の末二句の、李白への伝言を詠じる部分に、それは見える。『詳註』によれば天宝中、長安にあっての作である。

蔡侯静者意有余　蔡侯は静者　意余り有り
清夜置酒臨前除　清夜　置酒して前除に臨む
罷琴惆悵月照席　琴を罷め惆悵すれば　月　席を照らす
幾歳寄我空中書　幾歳か我に寄す　空中の書
南尋禹穴見李白　南に禹穴を尋ねて李白を見ば
道甫問信今何如　道へ　甫問信す　今何如と

この詩は、李白や杜甫と交流のあった孔巣父が病気を理由に官職を辞して、江東、すなわち江南に旅立つのを見送る送別の場で作られた。孔巣父は、孔子の末裔で若くして文名があった。（『旧唐書』巻一百五十四、孔巣父伝）。禹穴は、夏王の禹が蔵書を置いた地と伝えられ、この時李白がいた会稽をいったものである。「孔巣父よ、もし南に旅して古えの禹穴の地　会稽に李白を訪ねることがあったら、『今どうしているかと杜甫が尋ねていた』と伝えてほしい」と末二句で詠じている。ここでの「甫」という自称表現は、直接話法による伝言において、李白や孔巣父に対する親しさから、自身の名前を直接自称として使ったものである。（もちろん、伝言の内部では、孔巣父による他称だが。）それは、「李白」と直接姓名で名指しして李白自身を表現するのと対応している。杜甫は天宝五載の春、李白と別れてすぐの作「春日憶李白」（春日　李白を憶う）詩においても、「白也詩無敵、飄然思不群」（白や　詩に敵無し、飄然　思ひは群ならず）と、李白を「白也」と直接名前で呼んでいる。自他を含め

て、本来は本名を呼ぶことはあまり無い。親友である親しさから直接名前で呼んでいるのである。また、この詩の詩題を初め、他の李白に送った詩においても「李白」と姓名をそのまま記述している。[6] 自身を「甫」と自称するのもこれと同様に孔巣父や李白への親しい関係を表わす表現である。

右に挙げた「送孔巣父謝病帰遊江東兼呈李白」の例は、心許す人々に対して、自分の名をあえて使用したものである。この自称表現は、一人称代名詞に較べて、自分を相手と同等の存在としてはっきりと打ち出し、親しい相手に率直に語りかけるニュアンスのあることがうかがわれる。

次に②の例を検討する。天宝七載（七四八）の作「奉贈韋左丞丈二十二韻」（韋左丞丈に奉り送る二十二韻、『詳註』巻之一）に見える。この詩は、前年杜甫が玄宗皇帝の詔に応じ、一度は出仕の期待をもったものの、李林甫に遮られて、結局落第した際の作。書き出しから激越である。

紈袴不餓死　紈袴は餓死せず
儒冠多誤身　儒冠　多く身を誤る
丈人試静聴　丈人　試みに静かに聴け
賤子請具陳　賤子　請ふ　具さに陳べんことを
甫昔少年日　甫　昔　少年の日
早充観国賓　早く充てらる　観国の賓に
読書破万巻　書を読めば　万巻を破り
下筆如有神　筆を下せば　神有るが如し
賦料揚雄敵　賦には揚雄の敵かと料られ

詩看子建親　詩には子建の親かと看らる
李邕求識面　李邕は面を識らるるを求め
王翰願為隣　王翰は隣と為らんことを願ふ
自謂頗挺出　自ら謂へらくは頗る挺出せり
立登要路津　立ろに要路の津に登らん
致君堯舜上　君を堯舜の上に致し
再使風俗淳　再び風俗をして淳ならしめん

ここでは、叔父の尹済を「丈」「丈人」と呼び、それに対応する形で、自身を「甫」と表現している。叔父と甥とのいわば親戚関係を背景として、叔父に対して自身を親しく「甫」と表現しているのである。しかし、「甫」と自称したのは韋済との親しさからだけではないと考える。

この詩は冒頭において、当時の門閥優位の社会状況を大きく捉え、厳しい現実認識を示している。

続いて「丈人試みに静かに聞け、賤子請ふ具に陳べん」と続け、第五句「甫は昔　少年の日、早くも観国の賓に充てらる」以下、十二句までは自身の半生を自己評価し、学問に努め、とりわけ文学において秀でていると陳べる。漢賦の揚雄、魏詩の曹植に匹敵するとし、また、同時代の先輩詩人李邕や王翰が自身の詩を評価していると自信を陳べる。多少不遜ともみえるが、若い杜甫はそれだけ自身の文才に自信を抱いていたということだろう。第十三句から第二十八句では、そのような学問と文才によって、たちどころに官吏に登用されるとの期待を抱いたが、現実は厳しく、「君を堯舜の上に致し、再び風俗をして淳ならしめん」という高い理想もあえなく挫折したことを陳べている。

このように見てくると「甫」という自称が、叔父・甥の親しさからだけではなく、自身の生き様を自負を抱いて開陳する立場を示すために用いられていることがわかる。自身の個人的な経験を個人的な悲嘆として描くにとどまらず、時代状況の中でそれとぶつかりあう自己をはっきりと押し出して語ろうとする意思が潜在している。強い自負心と政治的理想を持ち、そのために激しく社会と対峙する存在として、自己を際だたせるために「甫」という自称が用いられているのである。そのためこの詩全体としては、杜甫の個人的な憤懣を述べるに留まらず、それを超えて歴史的事実を指摘する普遍性を獲得している。それは、「我」という一般的な一人称を使用せず、「甫」という名前による自称表現を使用したことに裏づけられているのである。

2 「甫也」

次に（B）、名前「甫」に「也」を付した場合について見ることとする。前述のように用例は三例であるが、③については、文字について諸説あるため、ここでは対象から除きたい。残る二例は次の通りである。

⑦甫也南北人　甫也　南北の人
蕪蔓少耘鋤　蕪蔓　耘鋤少なし
（「謁文公上方」『詳註』巻之十一）

⑧甫也諸侯老賓客　甫也　諸侯の老賓客
罷酒酣歌拓金戟　酒を罷めて酣歌　金戟を拓る
（「酔為馬所墜諸公携酒相看」『詳註』巻之十八）

⑦は、文公の廬をたずねた折の詩であり、文公を「吾師」と呼び、自身を「甫也」と称している。「也」は、特

に意味があるわけではなく、軽く付されている語気詞であるが、杜甫は自身の名前に付している点が注目される。「南北の人」は、東西南北に旅をして居所の定まらない人、漂泊の身の上であることをいう。『礼記』檀弓上には、「今丘也、東西南北之人也。」（今丘也、東西南北の人なり。）の用例がある。ここで、孔子は「丘也」と名前に「也」を付している。「丘也」の「也」によって、一拍の停頓が生まれ、そこで孔子が一瞬のためらいののち、一生涯定まった住居を持たない東西南北の人だと、自身についておもむろに語っているのである。杜甫はこれを意識しているだろう。

⑧は、宴会で酔った後、落馬によって怪我をし、諸公のお見舞いを受けたときの詩である。杜甫は馬を少年のときのように疾走させて、けつまづいたのであった。その冒頭にいささか自分を自嘲的に「甫也」と自称している。

⑦の例は、『礼記』中での孔子の「丘也」をふまえて「甫也」と自称している。このことから⑧の例でも同様に考えられるのではないか。「丘也」の場合、ただ「丘」と称するのと違い、「也」によって一瞬の停頓が生じる。一瞬の躊躇、ためらい―自己の生涯への思いをはせる時間―があり、おもむろに「東西南北之人也」と認めたくはないが受け入れざるを得ない自己表現の言葉が紡ぎだされるのである。孔子が自身の生涯を振り返り、居所を定めない漂泊の人生であったことをいささか自嘲的にいう表現である。同様に「甫也」の用例も、「也」の中には、一瞬の躊躇の時間があり、その停頓の後、自身の自己認識が語られるのである。そして、その場合も「甫」という形で自己を強く打ち出そうとする意識がまずあったことを忘れるわけにはいかない。自負心とまでは言えなくとも、自ら「甫」という自称で名乗りをあげる強い自意識がまずあり、それが「也」という停頓によって崩れ、自嘲へと変わってゆくのである。だから逆に、「甫」という自称自体の中には、自負心や自意識がこめられている

ということができるのではないだろうか。

3　「臣甫」

さて、(C)「臣甫」の自称について考えてみたい。「臣甫」の例が見えるのは「北征」詩である。すでに第二節で「杜子」を考察したが、「杜子」が歴史的な時間、事実に向き合う公的存在として自己を描きだしているのに対して、「臣甫」は、公的な存在であるという点で、「杜子」と共通するが、「皇帝」「君」に対して、「臣下」としての立場を明瞭にしている点が異なる。またもちろん、「杜子」が他称の形をとった自称であるのと異なり、明確に自称であることを示した自称であることは先に述べた。この「臣甫」という表現は、上奏文などに見られる表現であるが、ここでは、皇帝を二人称化する感覚と対をなし、あたかも皇帝を目の前にして、差し向かいで言葉を発しているかのような意識に立っている、と見ることが出来る。「君」という語は、主君の意であるが、その「君」が目の前にいて、主君に対して「臣甫」として直接語る感覚であろう。

雖乏諫諍姿　諫諍の姿に乏しと雖も
恐君有遺失　君に遺失有らんかと恐る
君誠中興主　君は誠に中興の主たり
経緯固密勿　経緯　固に密勿たり
東胡反未已　東胡　反して未だ已まず
臣甫憤所切　臣甫　憤りの切なる所なり

ここでは、臣下の立場から「君」(＝皇帝)に対して、安史の乱の収束していない状況に対する憂いと憤りを陳

べている。「臣甫」と名前に「臣」を冠する自称を用いることで、「君」（＝皇帝）と一対一で語る空間を構成し、「君」に対する憂慮を公的に伝える切実性を備えた表現であると言えるのではないか。「杜子」という自称ではじまったこの詩は、自己の私的な旅行が背負ってしまっている歴史的・公的性格を表現しようとするものだった。それが「臣甫」という自称に引き継がれてゆくことによって、いつのまにか皇帝に対面して、つまりあたかも公的存在として朝廷に立って直接語る状況に進展しているのである。その後でこの詩は、「我」という一人称によって、非常に私的な家族の姿を描き出す。

しかし、この私的な家庭の描写は、「杜子」「臣甫」と語られていた自称によって、そのまま公的で歴史的な意味を持っていることが明示されるのである。

五　まとめ

杜詩にはこの他に、字で自称する表現がみられる。それは「乾元中寓居同谷県作歌七首　其一」（乾元中、同谷県に寓居し作る歌　七首　其の一）にみえる次の表現である。

有客有客字子美　　客有り　客有り　字は子美
白頭乱髪垂過耳　　白頭の乱髪　垂れて耳を過ぐ

しかし、この字による自称表現については、稿を改めて論じることとしたい。

以上、杜甫の自称表現について、自身を姓に「子」を付して称する場合、名前で称する場合や名前に「也」を付して称する場合などについて、作者の自己認識はどのようであるかに着目して考察してきた。

第三節で取り上げた姓に「子」を付して「杜子」と称する場合は、後漢の馮衍や晋の潘岳が「馮子」「潘子」と

自称して、歴史的な重大局面に向き合い、表現者を詩の中に登場させた例に、わが身を重ねて表現している。「北征」詩における「杜子」という自称は、特に皇帝に向かって現在の時間の歴史的重さ、「杜子」が体験する事実の社会的な意味を語ろうとする公的な意味を帯びている点が特徴的であった。

この度の杜甫の旅がもともと背負っていた公的な経緯―房琯事件による弾劾と放免―と、私的な体験と見聞―民衆や家族の悲惨な現状―の持つ歴史的な意味、それらを正面から語ろうとする姿勢が「杜子」という自称によって示されているのである。そのために、この自称は「臣甫」という、よりアクチュアルな自称に変化してゆく。

「臣甫」は、文章に見られる自称表現の援用であり、皇帝に対して自身を臣下の視点で名乗っている。二人称的に「君」（＝皇帝）を眼前に引き出し、目の前にいる皇帝に直接語る感覚が鮮明になるのである。「杜子」と「臣甫」、この両者から抜き差しならぬ緊迫感に満ちた空間が構築されている。

これら微妙な自称表現の使い分けの検討を通して、杜詩の緻密な構成に改めて気づかされる。表現する内容・主題、表現手法などに応じて、しなやかに自称表現も微妙な感覚を活かしながら使い分けられているのである。

注

（1）川合康三氏は「『杜陵野老』―杜甫の自己認識―」（『中国文人の思考と表現』、汲古書院、村上哲見先生古稀記念論文集刊行委員会、二〇〇〇年七月）の中で、次のように杜甫の自己認識について鋭い考察を述べている。

「杜陵野老」という、自己をいやしめたことばで自己を語っていることは、自分自身をそのように客体化して捉える認識主体、もう一人の自分が存在することを意味している。つまり杜甫の自己認識はいわば入れ子構造になっていて、或る一つの型（たとえば「杜陵野老」＝杜甫ａ）をすっぽり収めるもう一人の発話者（杜甫ｂ）という二重構造が成立している。従来の自己の描き方では過去の典型に自分を重ね合わせることによって、類型のなかに融合して自

分という個我が消失するのだが、それに対して杜甫のこの自己把握は自分を客体化するもう一人の認識主体をもつことによって、提示された人物像とは距離を置いたもう一人の自分の存在を際だたせる結果になるのである。

なお、筆者は、「杜甫の『拙』について」（『中国文化』漢文学会会報四十七号、一九八九年）において、「杜陵野老」や「杜陵有布衣」という三人称的な表現で自身を呼ぶことについて考察し、「自分を物語の主人公のように描く、この三人称的な表現は、吉川幸次郎氏の指摘するように、「批評者としての自分を確認する」行為といえる。しかし、更にそれにつけ加えて言うならば、自己を突き離し、客体化して捉えようとする行為だった、と言えるのではないか。」と指摘した。

（2）東晋、陶淵明の「自祭文」にも、「陶子將辞逆旅之館、永帰於本宅」と見える（『陶淵明集校箋』巻之七）。

（3）陳子曰、「衛公之戦伐、無兵也。杜員外詠歌、無詩也。張長史草聖、無書也。」（『唐語林』巻一、言語）

（4）姓に「子」を冠した表現は、他人を呼ぶ呼称としては、普通に見える語であり、『唐人称謂』（牛志平・姚兆女編著、三秦出版社、一九八七年五月）では、「官吏称謂、二、人称」に「姓＋「子」」をあげ、次のように解説している。

『大唐新語』巻四：馬懐素曰、「臣識見庸浅、不見貞慎等罪。」則天意解曰、「卿守我法。」乃赦之。時朱敬則知政事、対朝堂執懐素手曰、「馬子、馬子、可愛、可愛。」【案】子、為古代男子的尊称或美称。

（5）後漢の馮衍は、京兆杜陵の出身であり、一方、潘岳は鞏県の居住であった。彼らが杜甫と同郷出身の敬愛する先人であったことが自らを重ねた要因かもしれない。

（6）「贈李白」（『詳註』巻之一）、「冬日有懐李白」（同上）、「夢李白」（『詳註』巻之七）、「天末懐李白」（同上）など。

（たにぐち　まゆみ・長野県短期大学多文化コミュニケーション学科）